

坂 尻 遺 跡

—昭和59年度緊急発掘調査概報—

1 9 8 5

静岡県袋井市教育委員会

序 文

坂尻遺跡では、昭和55年から58年にかけて、約 8000m² が発掘調査され、古墳時代前期から奈良・平安時代中世におよぶ複合遺跡であることが明らかとなりました。特に奈良時代については、袋井市最古の文字資料であります木簡・墨書土器や銅銭・鈎帯金具等、貴重な遺物が多数見つかり、倉庫群を思わせる掘立柱建物から判断して、令制施行直後の佐益郡（現掛川・袋井市域）郡衙跡（＝役所）であつたらうと推定されています。

今回の調査面積は、約200m²と少なかったのですが、古墳時代後期に属する竪穴住居跡が6棟も発見され、ともすれば、奈良時代のみが注目されがちであつた坂尻遺跡にあって、官衙が成立する以前の姿を甦らせてくれました。

言うまでもなく、埋蔵文化財は私たちの歴史・文化を正しく理解するために、ひいては現代社会を知るうえに欠くことのできないものであります。ところが埋蔵文化財は、ただ好奇の目で眺めているだけでは、私たちに何も語りかけてくれません。土器に文字を記した人々が、当時、人間としてどのように生きようとしていたのか、現代の個人個人の生き方、人生経験等と照らしあわせてみる時、初めて生き生きとしたものが生まれてくるものだと思います。こうした意味で、埋蔵文化財は、きわめて「能動的」な文化財と言うことができます。

ここに調査の概略を報告し、みなさま方とともに「能動的」な文化財、坂尻遺跡を考えてみたいと思います。

一口に200m²と言いましても、その仕事量は膨大なものであります。一飯一饌、困難な調査活動に従事されました作業員、調査補助員、資料整理員の方々、現地調査、本書のとりまとめに際しまして適切なご助言、ご指導を賜りました静岡県教育委員会文化課の諸先生方、静岡大学教授 原秀三郎先生、市原壽文先生、加藤芳朗先生、大阪市立自然史博物館の那須孝悌先生など、そして調査を応援し、温い目で見守ってくださいました地主の増井久雄氏をはじめ地元のみなさま方に、心から厚く御礼申し上げます。

昭和60年3月

袋井市教育委員会
教育長 鈴木 勲 一

例 言

1. 本書は、国庫補助金・県補助資金を得て袋井市教育委員会が実施した昭和59年度袋井市坂尻遺跡の緊急発掘調査概報である。
2. 調査は袋井市教育委員会社会教育課文化財係の寺田義昭・松井一明が発掘担当となり、静岡県教育委員会文化課（指導主事山下晃）の指導を得て実施した。
3. 本書の編集は松井が行った。
4. 本書の執筆分担は以下の通りである。

第1章第1節	吉岡伸夫
第2章第2節～第3節、第2章、第3章	松井一明
5. 挿図作成は、高野、森永、進藤の各氏の手を煩わせた。写真図版中現地写真は松井が、遺物写真は吉岡、前田両氏が行った。
6. 発掘資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。
7. 調査および本概報の発刊に係わる事務は、袋井市教育委員会社会教育課文化財係が行った。
8. 本概報を作成するにあたり、以下の人々の協力を得ました。（敬称略）
市原壽文、加藤芳郎、那須孝悌、佐藤正知、鈴木範子、高野由美子、原秀三郎、羽仁生保、前田庄一、松本一男、向坂綱二、森永明英、山崎克己、山本宏司、渡辺康弘

目 次

第1章 序 説	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 発掘調査の方法・経過・調査整理体制	1
i) 方法 ii) 経過 iii) 調査整理体制	
第3節 遺跡の周辺環境	4
第2章 遺 跡	
第1節 基本層位	5
第2節 遺 構	8
i) 掘立柱建物 ii) 竪穴住居跡 iii) 溝状遺構	
第3節 遺 物	16
i) 奈良～平安時代の遺構の遺物 ii) 古墳時代の遺構の遺物	
iii) 石製品・土製品	
第4章 まとめにかえて	33

表 目 次

第1表 S D 5 出土須恵器 坏、坏蓋、土師器 坏、模倣坏蓋、高坏法量グラフ	20
---	----

挿 図 目 次

第1図	袋井市周辺の主要遺跡分布図	2
第2図	板尻遺跡周辺地形図	3
第3図	基本層位図	5
第4図	発掘区域全測図	6~7
第5図	SB1・2実測図	8
第6図	SB3実測図	9
第7図	SH1~5実測図	10
第8図	SH6実測図	11
第9図	SH1・4・5カマド実測図	12
第10図	SD1~4実測図	13
第11図	SD5実測図	14
第12図	SD5遺物出土状況図	15
第13図	SD1~4 SB1出土遺物実測図	17
第14図	SH1・3出土遺物実測図	17
第15図	SH4出土遺物実測図	18
第16図	SH5・6出土遺物実測図	19
第17図	SD5出土遺物実測図(1)	21
第18図	SD5出土遺物実測図(2)	22
第19図	SD5出土遺物実測図(3)	23
第20図	SD5出土遺物実測図(4)	25
第21図	SD5出土遺物実測図(5)	26
第22図	SD5出土遺物実測図(6)	27
第23図	SD5出土遺物実測図(7)	28
第24図	石製品・土製品実測図(1)	30
第25図	石製品・土製品実測図(2)	31
第26図	古墳~中世包含層中出土遺物	32

図 版 目 次

図版 1	(A) 調査地点遠景 (B) 中世~奈良時代調査区全景 (C) 奈良~古墳時代調査区全景
図版 2	(A) 古墳時代調査区全景 (B) SD5遺物出土状況 (C) SD5遺物出土状況
図版 3	(A) SH5全景 (B) SH1カマド (C) SB1全景
図版 4	SD5出土土器
図版 5	SD5出土土器

第1章 序 説

第1節 調査に至る経過

坂尻遺跡では、国道1号線バイパスの建設に伴い、昭和55年～58年にかけて約8000m²が発掘調査されている。

常日頃から坂尻遺跡発掘調査のお世話をいただいている鎌田盛氏を介して、地主増井久雄氏より、国1バイパス隣接地にメロン栽培用の温室を増築したい旨連絡を受けたのは、昭和58年10月20日であった。袋井市教育委員会は、直ちに五島康司（社会教育課指導主事）を増井久雄氏宅に向かわせ、温室の増築計画について事情を伺った。増井氏はすぐにも土地造成を始めたといふことであった。

メロンは袋井市が誇る、一大名産品である静岡県教育委員会文化課と連絡をとり、増井久雄氏の意向に添うべく、緊急発掘調査を実施する方向で協議を重ねたが、早急に調査費・調査員を確保するのは困難であった。過去数年間、地元で行われた大規模な発掘調査を目の当たりにし、今また実際に、埋蔵文化財発掘調査の問題に直面した増井久雄氏の心中は、察する余りあるものであったが、袋井市教育委員会は粘り強く坂尻遺跡の重要性を訴え、発掘調査の実施に理解を求めた。本発掘調査を実現しえた背景には、静岡県教育委員会文化課をはじめ、関係者のご努力と、地主増井久雄氏ご家族の地元文化財に寄せる熱い事情によるものであったことを、ここに記しておきたい。

袋井市教育委員会は国・県の補助金を得て発掘調査費を予算化し、昭和59年4月2日、現地調査を開始するに至った。

第2節 発掘調査の方法・経過・調査整体制

i) 方法（第4図）

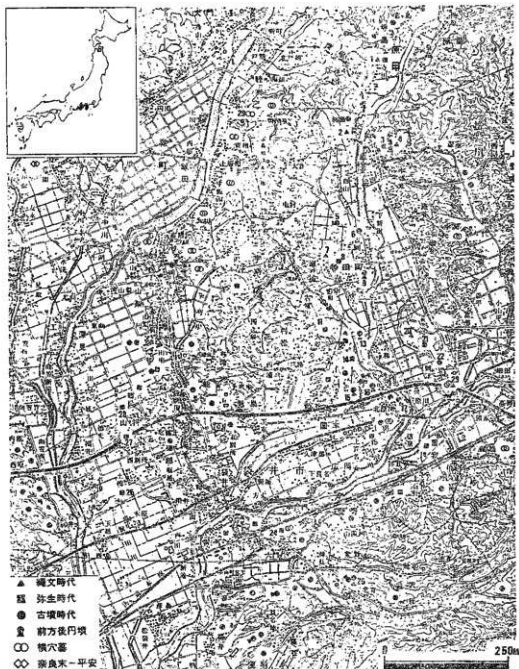
発掘調査区に合わせて10×10mの大グリッドを設定し、その中を5×5mに分割し中グリッドとした。名称は南北方面をAとし、東西方向を西より1、2、3とした。中グリッドは北東を1、南東を2、北西を3、南西を4と命名し、大グリッドに併記した。（例えばA1-1）現地作図面は中グリッド単位、20分の1縮尺を基本とし、遺物の微細図などは随時10分の1縮尺図を作成した、記録写真はブローニーサイズ原画（白黒）、35mmサイズ原画（白黒、カラーリバーサル）で撮影した。

ii) 経 過

昭和59年4月2日～7日 測量用やり方設定後、I c層の掘り下げ。

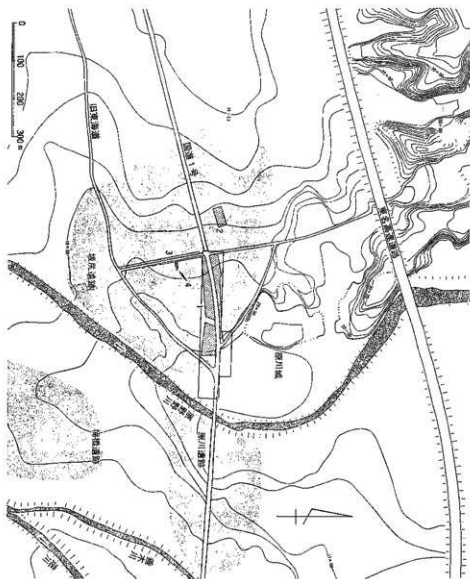
4月9日～4月11日 奈良、中世の遺構を調査。掘立柱建物、溝が検出しはじめた。遺物は山茶碗などが出土した。写真撮影後実測作業に取りかかる。

4月12日～4月16日 III a層を掘り下げる。3 A区を中心に遺物が多く出土する。



第1図 Fuji市周辺の主要遺跡分布図

- | | | | | |
|------------|------------|-------------|--------------|-------------|
| (1) 寺島遺跡 | (7) 瀬戸山古墳 | (13) 金原古墳 | (19) 国本遺跡 | (25) 長者平遺跡 |
| (2) 幡鎌遺跡 | (8) 和田岡原遺跡 | (14) 浅間山遺跡 | (20) 岡津原Ⅰ遺跡 | (26) 土橋遺跡 |
| (3) 長福寺遺跡 | (9) ひさご塚古墳 | (15) 浅間山古墳 | (21) 岡津原Ⅱ遺跡 | (27) 徳光遺跡 |
| (4) 本郷遺跡 | (10) 石原沢遺跡 | (16) 権現山古墳 | (22) 岡津八幡内古墳 | (28) 鶴松遺跡 |
| (5) 吉岡大塚古墳 | (11) 久野山遺跡 | (17) 宇佐八幡古墳 | (23) 向山遺跡 | (29) 観音堂横穴 |
| (6) 春林院古墳 | (12) 陳屋北遺跡 | (18) 坂尻遺跡 | (24) 地藏ヶ谷古墳群 | (30) 稻荷領家遺跡 |



第2図 坂尻遺跡周辺地形図

(1. 旧1バイパス調査地点 2. 工場建設予定調査地点 3. 県道調査地点 4. 本調査地点)

4月16日～4月23日 古墳～奈良時代の遺構面調査。掘立柱建物、竪穴住居跡、溝等が検出された。竪穴住居跡は4～6軒の切り合いが認められ、SD5とした溝状遺構から古墳時代後期の土器、石器が多量に出土し、期間、予算とも困難な調査となった。写真撮影後実測作業に取りかかる。

4月24日 III b層を掘り下げる。遺物出土量は少なくなり、包合層は完掘した。

4月25日～5月2日 竪穴住居跡は6軒、溝状遺構もさらに中下層から完形品が多数出土したが、写真撮影・実測後撤収作業も終了し、現地作業は無事すべて完了した。

iii) 調査・整理体制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

指導主事 山下 晃

調査実施機関 静岡県袋井市教育委員会

教育長 鈴木勲一

社会教育課長兼文化財係長 永田新作

指導主事 寺田義昭（発掘調査担当者）五島康司

文化財係 吉岡伸夫、永井義博、松井一明（発掘調査担当者）

調査参加者 三浦政平、三浦久雄、石川一二、川村義雄、萩田千代子、三浦とく江、山本まさこ、太田清子、鈴木敏子、寺田しま、山崎雪江、福田きみ、鈴木きみ子
戸倉みつ子、海野こう

資料整理 進藤貴和子（立正大学学生）

第3節 遺跡の周辺環境

坂尻遺跡の歴史的、地理的環境については、図1 バイパスの報告書、概報等ですでに詳しく説明されているので、本節では近年調査が行なわれた、古墳時代の周辺遺跡との係わり合いについて簡単に述べてみたい。

坂尻遺跡の立地する自然堤防と原野谷川を挟んで東岸に位置する掛川市原川遺跡は、6世紀初頭～7世紀前葉期までの長期間営まれた集落である。なかでも掘立柱建物群が多数検出されており、注目される。原川遺跡より南へ200mの所に原川遺跡の立地する同一の自然堤防上に位置する梅橋北遺跡がある。梅橋北遺跡では目立った遺構の検出はなかったものの6世紀後半～7世紀前半の遺物が出土しており、付近に同一時期の集落が存在していたと理解される。

一方坂尻遺跡では、4～7世紀までの長い期間集落が存続し、遺物、遺構とも豊富に出現しており、安定した集落であったことが窺取される。集落の流れの画期は5世紀と6世紀との間に大きなものが認められた後6世紀後半に飛躍的に遺物量が増大する。こうした状況から原川、梅橋北遺跡を見ると6世紀前半に本遺跡外に集落の拡大があり、後に6世紀後半に集落が増加・安定化していったことが認められる。この原因は自然環境ばかりでなく、各集落内の労働力の集約、技術革新による生産量の増加、安定、家父長層の台頭による社会的変革によると考えられ、本遺跡北方の谷奥に営まれた菅ヶ谷横穴群にもその状況を見ることができるのではないだろうか。

第2章 遺 跡

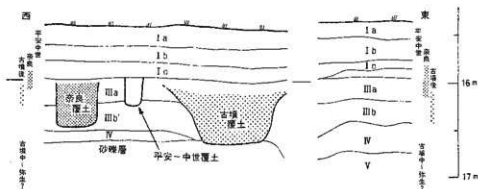
第1節 基本層位 (第3図)

版尻遺跡の基本層位は、すでに国1バイパス第1次調査報告書中や県道調査報告書中などで触られている。本調査地点でも概ね、対応するものの若干異なる点もあるため、それらを中心に記述してみたい。

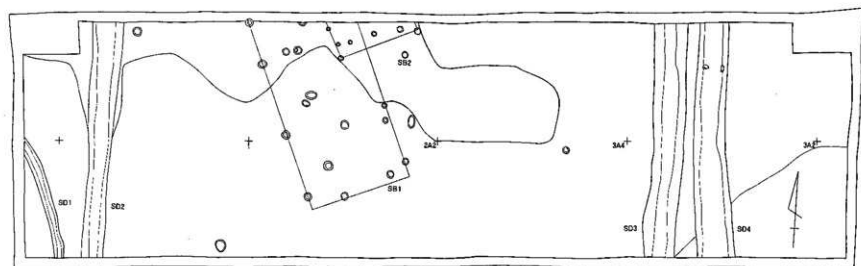
表土層は、前回同様にⅠa層現耕作土、Ⅰb層旧耕作土層に分別した。Ⅰb層の下には、山土のような黄褐色土と小砂礫を多量に含んだ層があり、調査区東端ではⅡ層(灰色粘土層、奈良～平安時代包含層)に覆いかぶさる状況が観察されたことから、Ⅰc層と命名した。Ⅰc層中には奈良～中世の遺物を多く包含することや、中世の包含層である黒色粘土層が認められないことから、Ⅰc層は中世のある時期に黒色粘土層、Ⅱ層、Ⅲa層の一部を擾乱した大規模な原野谷川の洪水の痕跡ではないかと思われる。

Ⅲa層(マンガン粒子を多く含んだ暗褐色粘土層)は上部より奈良時代の遺構が、中位より6世紀末～7世紀前半期の古墳時代の遺構が振り込まれていることが観察された。Ⅲb層(あまりマンガン粒子を含まない暗褐色粘土層)は、発掘区域東端では古墳時代の遺物を包含するが、西端部に広がる砂礫層上を覆うⅢb層類似の層には遺物の出土はなく、本来報告されているⅢb層よりも色調が明るく、マンガン粒子の含有量も少ないためⅢb'層とした。

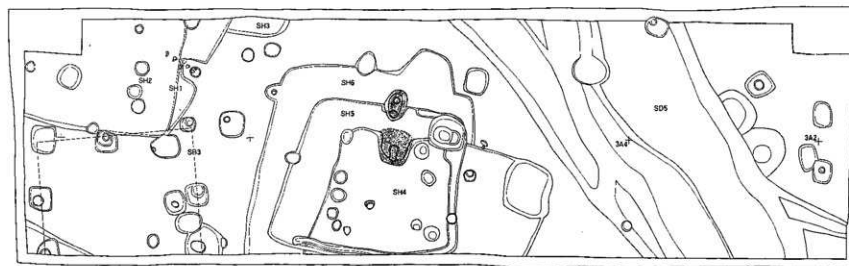
Ⅲb層下では、砂質土のⅣ層があり、その下は発掘区域西端には砂礫層が広がり、東端では小礫を多く含んだ青灰色砂層のⅤ層が確認された。Ⅴ層は砂礫層よりも新しい層であることが認められたことから、Ⅴ層については古名栗川の堆積物、砂礫層は古名栗川自然堤防の基盤層の一部と考えられる。なおⅤ層中より5世紀代の土器(第26図1)が出土していることから、古名栗川の埋没時期は5世紀～6世紀初頭と考えられる。



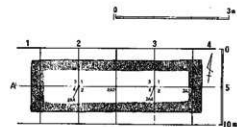
第3図 基本層位図(発掘区東西ライン西端・東端層位)



(1)中世—奈良時代遺構面



(2)奈良—古墳時代遺構面



第4圖 発掘区域全測図

第2節 遺構

i) 掘立柱建物跡

SB1・2 (第5図)

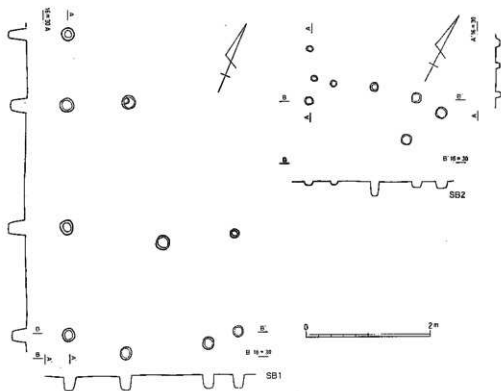
いずれも直径20cm前後、深さ10～30cm程度の小ビットのまとまりで、桁行、梁行とも不揃いな建物である。抽出しえたのは2棟であるが、ビットの数からさらに1～2棟の抽出が可能と思われる。間口はSB1で2間×3間以上になる長い建物である。主軸方位は、SB1でN-21°-W、SB2ではN-28°-Wを測る東向の建物である。時期はビットの覆土が暗灰色～黒灰色を呈することから、中世～平安時代のもと考えられる。

SB3 (第6図)

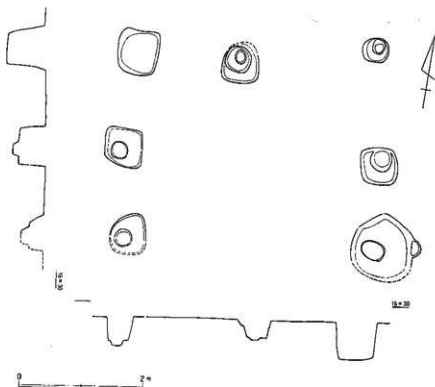
調査区域西端で検出された2間×2間の建物で、さらに南の発掘区域外にのびていく可能性がある。柱穴は60×60cmの方形の掘り方をもった板瓦遺跡では普遍的な規模の建物である。間口規模は1.5～1.6m、主軸方位N-10°-Wを測る。時期は掘方より出土した土器、覆土にⅢa層よりやや暗い暗灰色土が認められたことから、奈良時代と考えられる。

ii) 竪穴住居跡

SH1 (第7図)



第5図 SB1・2実測図



第6図 SB3実測図

SH1～SH3は重複が認められ、古い方からSH3→SH2→SH1の新旧関係が与えられている。

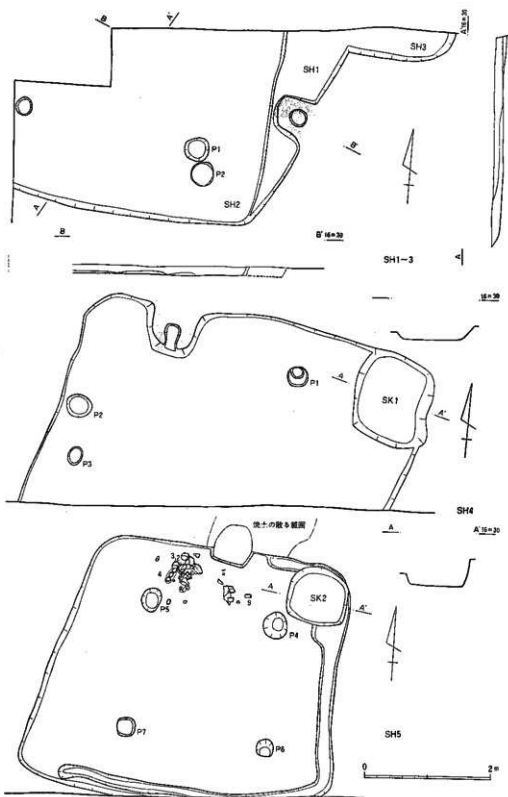
SH1は、東にカマドを設けた一辺4m以上になると思われる隅丸方形の堅穴住居跡である。西、北壁については発掘区域外であり、南壁についてはSH2の覆土を一部掘りすぎたため明確な壁線を検出していない。P1、P2などは深さ約20cmを測るため主柱穴になると思われる。ほかに貯蔵穴などの屋内施設は検出されなかった。時期は出土遺物より6世紀末になると思われる。主軸方向はN-22°-Eを測る。

SH2 (第7図)

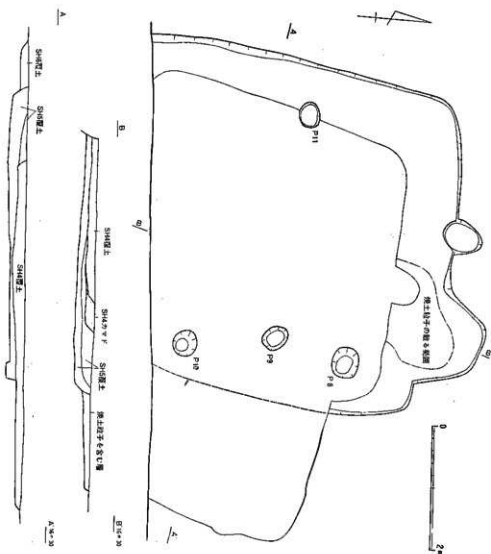
SH2は、SH1とほぼ重複するため、大半は失われているが、床面がSH1より、やや深いため確認しえた。おそらく北方向にカマドをもった、一辺4m以上の規模になる方形の堅穴住居跡である。主軸方向はN-2°-Eとほぼ北方向である。主柱穴は比較的浅いP2などを考えている。時期は出土遺物がないため不明であるが、SH1とコーナーを同一にするなど強い関連性をもっていると思われる点、SH3との関連などから、6世紀末と考えられる。

SH3 (第7図)

南東のコーナーの一部が検出しえたのみで、大半は発掘区域外となっている。おそらく隅丸方形の住居跡になると思われる。時期は高坏の坏が一点出土したのみで、不確定であるが、6世紀後半と考えている。



第7図 SH1~5実測図

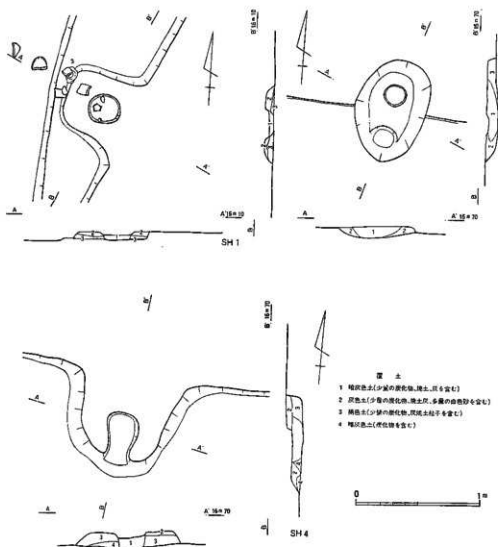


第8图 SH6 实测图

SH4 (第7図)

SH 4～6は、重複が認められ、古い方からSH 6→SH 5→SH 4の順で新旧関係が与えられる。

SH 4は、北にカマドを設けた一辺5.6mの隅丸方形住居跡になると思われる。床面は軟弱で貼り床状を成さないが、カマド付近を中心として炭化物が多く散布する面があるため、この面が床面と考えられる。カマドは北壁の西より設けられている。中心近くに第24図5と類似した土製支脚が設置されていたが保存が悪く取り上げられなかった。北東コーナー付近には1.2×1.3m、深さ約20cmを測る方形の貯蔵穴がみられる。支柱穴の抽出はP1～P3が考えられたが、P1以外は位置的に支柱穴とは認められない。床面積は隅丸方形になると仮定すれば、約



第9図 SH1・4・5 カマド実測図

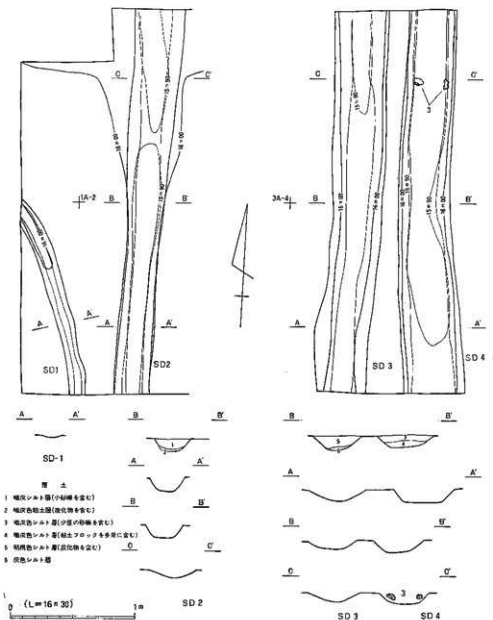
31m²になると思われる。主軸方位はN-20°-Eを測る。時期は6世紀末と考えられる。

SH5 (第7図)

SH5は、北にカマドを設けた北壁4.2m、南壁5.0m、東西壁4.2mを測る、やや台形気味の隅丸住居跡である。カマドは北壁中央に設けられている。カマドを中心として焼土粒子がSH6北壁の一部を切って分布しており、住居廃絶後にカマドを破壊している状況が看取しえた。貯蔵穴は北東コーナーにみられ、規模は95×95cm、深さ20cmを測る。主柱穴は四隅にP4～P7が抽出しえた。いずれも砂礫層を30cm以上掘り込んだ深い柱穴である。東壁、南壁、北壁の一部に壁溝が見られた。床面積は19m²を測る。遺物はカマド付近とカマド上の攪乱層よりまとまって出土している。時期はSH4より若干古く、6世紀中～後半と思われる。

SH6 (第6図)

SH 6は、一辺5.3mを測る隅丸方形になると思われるが、東壁はSH 4に切られ、南壁も発掘区域外になっているため不明な点が多い。カマドは検出されなかったが、北壁にSH 5のカマドを壊した際の攪乱の張り出しがあり、あるいはこの範囲にカマドがあったかもしれない。柱穴はP 8～P 11が抽出しえたが、位置的にはP 8、P 10などが主柱穴に該当する。主軸方位はN-9°-Eを測る。床面積は隅丸形と仮定するならば約28m²になると思われる。時期



第10図 SD 1～4 実測図

は遺物も少なく明確にしないが、SH 5 とさほど時期差はないと考えられる。

iii) 溝状遺構

SD1 (第10図)

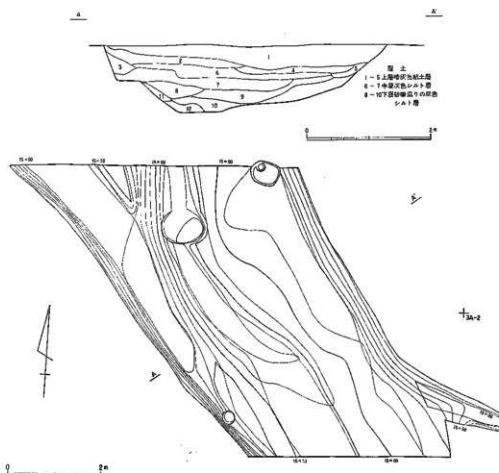
発掘区域西端に検出された溝状遺構である。巾25cm、深さ5cm小規模な溝で、カーブを描きながら北西から南へ延びている。覆土は小礫を多く含んだ粘土層である。時期は遺物から12世紀前半と考えられる。

SD2 (第10図)

SD1のすぐ東側に検出され半軸方位N-5°-W、巾50cm、深さ20cmを測る南北方向にのびた溝状遺構である。断面形は立ち上りが緩やかなU字形で、覆土はSD1類似した小砂礫混りの粘土層である。時期は遺物が少なく明確に決定しえないが、12世紀前半と思われる。

SD3 (第10図)

発掘区域東端付近に検出された。SD2と同じく北から南へ直線的にのびた巾60cm、深さ20cmを測る溝である。断面形は立ち上りが緩やかなU字形を呈する。覆土はⅢa層よりやや



第11図 SD5 実測図

暗い暗灰色土層で、12世紀代の溝とは異なる。時期は出土遺物から奈良時代後半と思われる。

SD4 (第10図)

SD3 東側に平行して検出され主軸方向はSD3と同じく北から南へ直線的に延びた、巾90cm、深さ20cmを測る溝状遺構である。断面形は立ち上り急なコの字形を呈する。時期は出土遺物から12世紀前半と思われる、SD2、掘立柱建物(SB1・2)との関連が注目される。



第12図 SD5 遺物出土状況図

SD5 (第11・12図)

発掘区域東端に検出された溝状遺構である。発掘区域北端で緩やかに流路を北向きに変えるようで、蛇行しながら北から南東方向に延びていると考えられる。底は西端下場が深いため、通常は満水状態でなく部分流水していた可能性が指摘される。巾4m、深さ1mを測り板瓦遺跡では大規模な溝である。主軸方向はN-30°~10°-Wを測る。本溝の西壁には、主軸方向N-40°-W、巾1.4m、深さ60cmを測り、北西に延びた枝溝が接続している。東壁にも巾60cm深さ30cmの枝溝が1本接続しているが、方向的には別時期のものかもしれない。遺物は枝溝から、西壁付近にかけて一括廃棄されたように出土している。出土層位は、中層からまをもって出土している。覆土は下層が砂礫を含んだ層でよく流水していたとも考えられるが、中、上層になると次第に粘土質となり、溝の改修が行なわれなくなってきたことが看取される。时期的には最下層で、6世紀初頭と考えられる古手の須恵器が出土しているが、中下層では6世紀後半~7世紀初頭の土器、上層では7世紀前半の須恵器が主体となり、堅穴住居跡との関連が注目される。

第3節 遺物

i) 奈良~平安時代の遺構の遺物 (第13図)

平安時代の遺物はSD1、2、4から出土している。いずれも小破片で時期決定しえないが、やや深い小塊になると思われる3、高台が四角形を呈する小塊の1、口径17cm、高さ6.5cmを測る塊がある。3の塊は四角形の高い高台が付けられ、口唇部をやや外反させたもので、潰け掛けされた灰釉が施される。いずれも以上のような特徴から12世紀前半と考えられる。

奈良時代の遺物はSD3、SB1より出土している。4は口径15cmの坏蓋、5の口唇部に面をつくる口径14cm、高さ2.5cmの皿で、8世紀後半に編年されると考えられる。6、7はSB3の柱穴内出土の土器で、6は古墳時代の坏身、7は奈良時代後半の坏蓋である。

ii) 古墳時代の遺構の遺物

SH1 (第14図)

須恵器は、坏蓋、坏身、有蓋高坏、蓋などが知りえた。坏蓋は口径12~13cm、高さ3.5cmのものがある。天井部と口縁部の境に沈線を施す1、2がある。口唇部は外傾する1、4、やや内彎気味の2がある。天井部ヘラケズリは1~2段のものが多く、3などは1段のヘラケズリののちナデを行った粗雑化の目立つものである。坏身は最大径10cmの小形化したもので、覆土上層より出土した。6は有蓋高坏の坏部である。口径13.0cmで受け部は小さくやや口唇部をつまみ上げた形態をしているおそらく2段スカシの長脚が付くと思われる。7は最大径17cmの大型の蓋である。

土師器は坏、壺、甕などが知りえた。8は口径12cm、高さ4.6cmの口縁が丸みをおびた坏である。9は口縁が直立した皿形壺の口縁、11はやや口唇をつまみ上げたくの字状に外反させた広口壺の口縁と思われる、10は緩やかに外反した甕の口縁である。

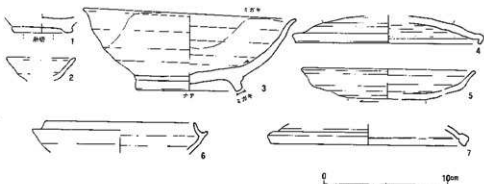
時期は、5の坏身を除いてほぼ中村編年Ⅱ型式5段階、田辺編年のTK209に相当すると思

われる。

SH3 (第15図)

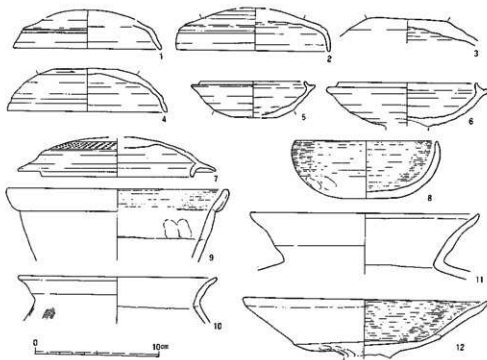
12の高坏坏部1点が出土した。口径19.8cm、高さ4.2cmの口縁をやや外反させた浅いつくりの坏部である。時期的には県道調査分S I 4の高坏に比べると口縁の外反度が弱まる点、坏部の稜線のつくりがあまくなる点から型式的には後出の要素が見られ、SH1とS I 4の中間の時期が考えられよう。

SH4 (第16図)



第13図 SD1~4、SB1出土遺物実測図

(1SD1、2SD2、3SD4、4・5SD3、6・7SB1)



第14図 SH1、3出土遺物実測図 (1~11SH1、12SH3)

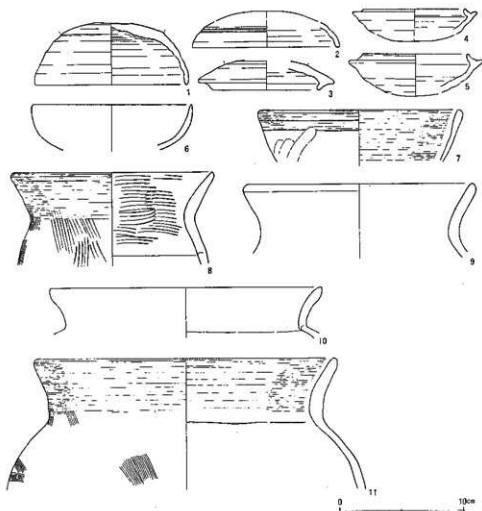
須恵器は坏蓋、坏、壺蓋などが知りえた。坏蓋は口径12~13cm、高さは5cmと高い1などが認められる、坏身は最大径10cmの4、やや大型の最大径11cmが知られるが、いずれも覆土上層出土である。3は最大径11.0cmを測る壺蓋である。

土師器は坏、壺、甕が知り得た。坏は口径13cmで口縁が直線的に立ち上がる6がある。壺は直線的に外傾した埴形壺の7、広口の10、11などの大形壺がある。甕は緩やかにくの字口縁をもつ8、9がある。

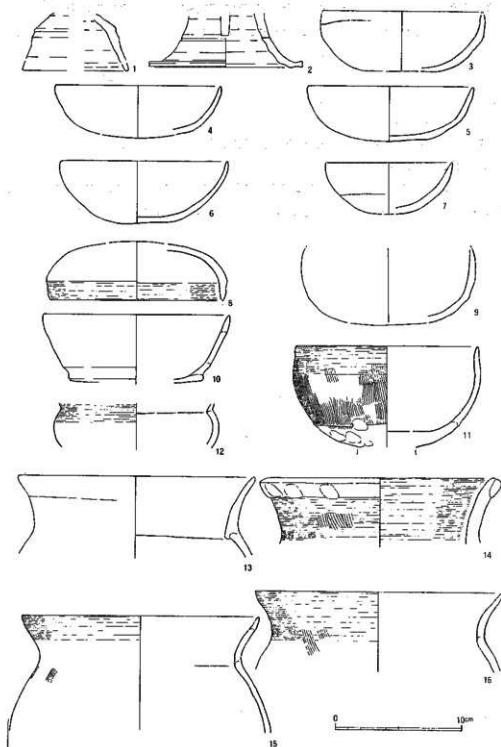
時期としては中村編年Ⅱ型式6段階、田辺編年TK209段階あたりと考えられる。

SH5（第16図・第17図）

須恵器は坏、高坏脚が見られる。1の坏は小破片であるが、口唇を丸くおさめ、やや外傾した口縁をもち、天井部と口縁の境の稜線も不明瞭ながら作り出されている。2は2段スカシの



第15図 SH4 出土遺物実測図（6・7カマド付附、8~10貯蔵穴内）



第16図 SH 5・6 出土物実測図
 (1~4・12・14SH 5、5・7・9~11SH 5 カマド付近)
 (8・13・15SH 5 カマド土攪乱、16SH 6)

入る長脚高環の脚部と思われる。

土師器は、坏、模倣坏蓋、高環、埴、脚付埴、甕などが知られる。坏は口径13.5cm内外の中形のもの、口径10cmの小形のものがある。中形のは外に開き気味の口縁をもつ4～6、やや直立気味の3がある。9は深さのあるボール状の埴である。口縁は内彎する。8は口径14.5cmの模倣坏蓋である。10は直線的に開いた口縁をもち、鋭く稜線をつけた高環の坏部である。第21図83は口縁をくの字状にやや外反させた短脚の高環である。11は埴に脚のつく脚付埴とでもいえる器形である。12は扁平な脚部をもつ埴形壺、14は折り返し口縁の広口壺である。13、15は緩やかに外反した口縁をもつ長胴壺の口縁である。

時期は、1、2の須恵器から中村編年Ⅱ型式4段階、田辺編年TK43あたりになると思われる。土師器についても前段階と思われるSH1、SH4などに比べると坏の口径の大形化、甕などの口縁の接合部のつくりが緩やかである点からも古い要素が感じられる。

SH6 (第16図)

緩やかに開き、口唇をつまみ上げた口縁部をもつ長胴壺の12のみが図示した。時期としては、SH5出土の15などの甕と類似し、SH5とはほぼ同じ時期と考えられる。

SD5 (第17図～第23図 第1表)

須恵器

須恵器の器種は坏、坏蓋、空蓋、壺、フラスコ瓶、脚付埴、高環、長頸瓶、模瓶がある。

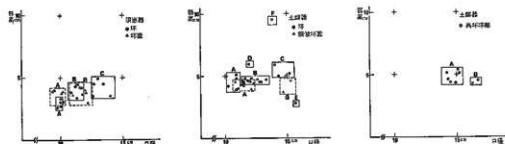
坏蓋は口径により以下の通り分類した。また分類基準としてはアルファベットは時間差、数字は系統の差ととらえて記述をすすめた。

A類 (1～5、8) 口径9～10.5cmのグループ。器高は4cm内外のやや高い1、3、5、8と3cm内外のあまり高くない2、4がある。天井部と口縁部の境目に沈線を施す1、3、5をA2類、他をA1類とした。1などは口唇を内彎させたり、ヘラケズリを2段以上施すなど古い要素が見られる。

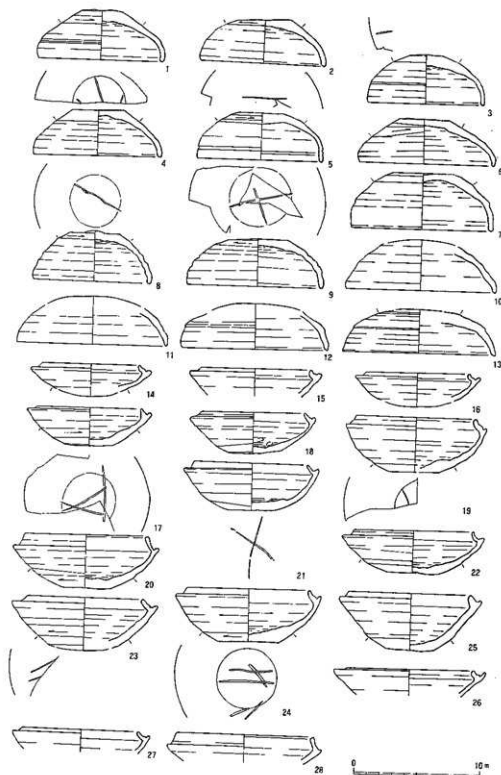
B類 (6、7、9～13) 口径11～12cmのグループ。器高は3～4.5cmとバラツキがある。12、13などは天井部と口縁部の境目に沈線を施す点よりB2類、他をB1類とした。

坏身は最大径より以下の通り分類し、受け部の作りで系統分けをした。

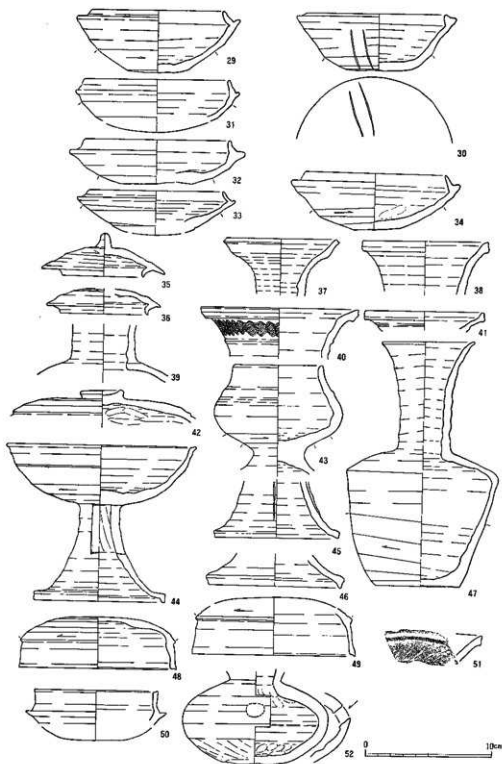
A類 (14～18) 最大径10cm内外、蓋高3cm内外になるグループ。受け部の口唇をつま



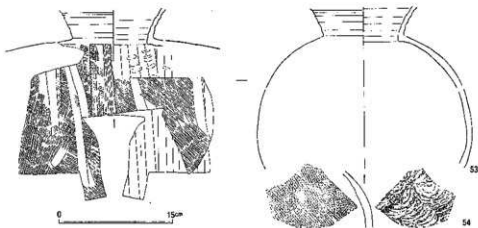
第1表 SD5出土須恵器坏、坏蓋、土師器坏、模倣坏蓋、高坏法量グラフ



第17圖 SD5 出土遺物実測圖 (1)



第18圖 S D 5 出土遺物実測図(2)(48・50~52最下層、49中~上層)



第19図 SD5出土遺物実測図(3)(2最下層)

み上げる14~16をA1類、直線的に内傾する18をA2類、肉厚の受け部をもつ17をA3類とした。本遺構の場合上層はA類が主体的である。

B類 (19~28) 最大径11~12cmのグループ。最高は3~5cmとバラツキが見られる。受け部の口唇をつまみ上げる19、22、24、26、27をB1類、直線的に内傾する21、23、28をB2類、肉厚な作りになる25をB3類、やや直立気味に内傾する20、28をB4類とした。

C類 (29~34) 最大径12.5~14cmのグループ、器高は3.5~5cmのバラツキが見られる。受け部を大きく内傾する29、33をC2類、肉厚に作る30をC3類、直立気味に内傾する31、32、34をC4類とした。

以上のように坯蓋A類は坯身A類と、坯蓋B類は坯身B類、坯身C類についての蓋は明瞭にセット関係を抽出しえなかった。型的には坯蓋はB1類→A1類、B2類→A2類に変化すると考えられ、2類系の方がより古い要素を残していると思われる。坯身についてはB1類→A1類、C2類→B2類→A2類、C3類→B3類→A3類、C4類→B4類の型式変化が与えられた。系統的には4類系が最古要素で、A類段階では見られない。3、2類系はA~C段階に見られるが、B類系は数少なく2類系はA類段階に減少する変化がある。1類系はB類段階に現われA類段階で盛行するようである。また1類系はC2類の中にやや口唇部をつまみ上げるものが存在することからC2類の中からB2類段階に入って分化したものと考えられる。

他の器種についても坯身の分類段階(A~C類)を基準とし、層位的出土の事実(A類が上層、B類が中層、C類が中層下~下層を中心として出土する。)からおおよその時期決定を試みたい。

壺蓋は受け部が口唇近くに付く36、やや内側になる35の2種がある。35は中層より出土しているためB類~C類段階と考えたい。36についてはA類段階とも考えられる。

37は壺の口縁で、接線の作りもあまいことからA類段階の可能性が高い。上層出土。

38、39、41はフラスコ瓶と思われるが、41が中層より出土した以外は上層出土でA類段階になる可能性が高い。

44～46は高坏で、1段スカシの丸い坏部をもつ44、スカシが沈線化した41はB類段階、脚端部を強く引き出す46はA類段階のものと思われる。

43の脚付碗はやや胴の張った碗部をもつものでB～C類段階と思われる。

47の長頸瓶は胴の張った平底のもので、上層より出土している。A類段階のものであろう。

53は大形の横瓶である。外面はタタキメ後糸圧痕後ヘラナデ、内面はヘラによってタタキメ（無文様であることから内面当て道具は石か？）をナデ消している。上～中層から出土しており、B類～C類の時期が考えられる。

以上須恵器で見る限り、他地域との併行関係を求めるならば、坏身A類段階は中村編年Ⅱ型式6段階、田辺編年TK217、B類段階は中村編年Ⅱ型式5段階、田辺編年TK209、C類段階は中村編年Ⅱ型式4段階、田辺編年TK43に相当すると思われる。

SD5出土須恵器はほかに最下層出土の48、54、中～上層出土の49～52など、C類段階より数型式も古くなるものが出土している。いずれかの遺構と切り合い混入したものと考えられるが、おおまかな時期決定をしてみたい。坏蓋は天井部が丸みをおびるが、口唇部は面をしっかりと作る。坏身も直立した受け部と口唇部にも面をしっかりと作る。52の建は扁平な胴部をもち、底部下半は指頭ナデ調整を施す。51は櫛の波状文を施す暗灰色の壺の口縁、54は格子タタキメ後カキメ調整の施された壺形土器の胴部波片と思われる。坏蓋の稜線の作りがややあまい点が気になるが、おおむね中村編年のⅠ型式5段階、田辺編年TK47段階に該当する。

土 師 器

土師器は坏、模倣坏蓋、高坏、壺、甕、台付甕などの器種がある。

模倣坏蓋は口径により以下の通り分類できた。分類方法は須恵器に準じた。

A類（50～60） 口径11～12cmのグループ。器高は4～4.5cmを測る。口縁が開き気味な56、57、60をA1類、口縁が開かず垂下する55をA2類とした。

B類（58～59） 口径15cm内外のグループ。器高は3.5cm～5.0cmとバラツキがある。天井部はあまり丸味をおびず、口縁は開かないB2類のみが知りえた。

坏は口径により以下の通り分類したが、D類以下は時期差でなく系統的に異なるものとして分類しておいた。

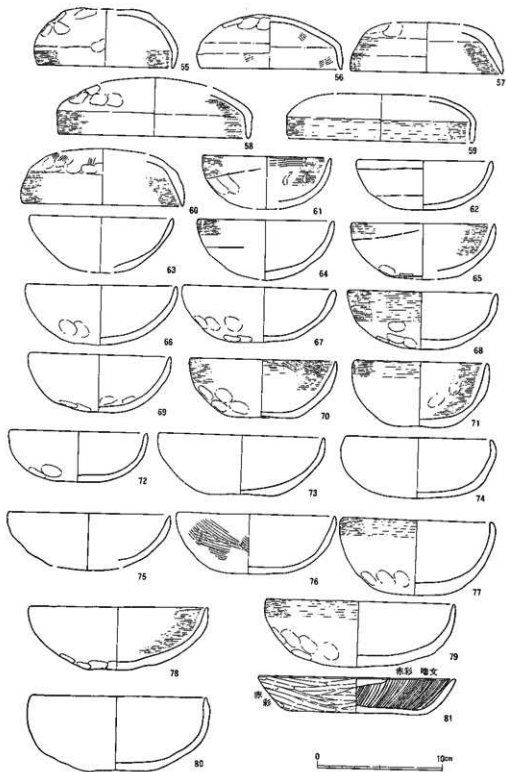
A類（61、62、64、71、72） 口径10～11cmのグループ。器高は4～5cmとバラツキがある。口縁は内彎するものはなく、やや開くものが主体を占めA1類とした。

B類（63、65～70、73～76） 口径11.5～13.5cmとややバラツキがあるが、器高は4.5cm内外に集中する。口縁は内彎させた77以外はすべて、やや外に開き気味で、前者をB2類後者をB1類とした。

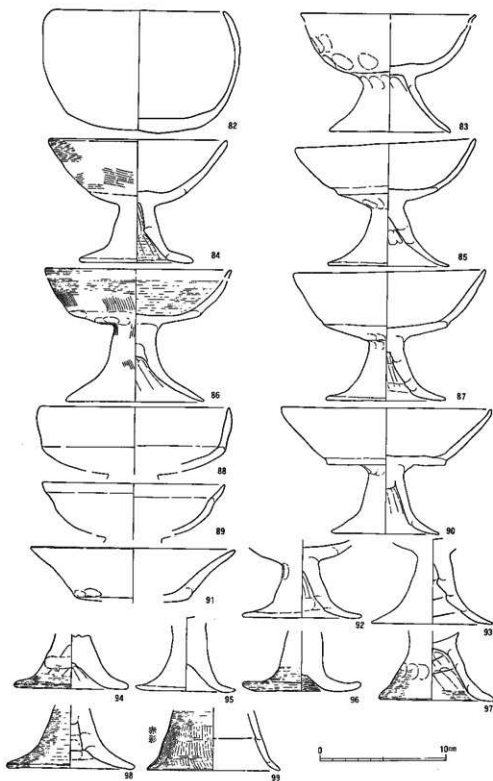
C類（78～80） 口径9～10.5cmのグループ。器高は5～6cmとバラツキがある。口縁は内彎しないC1類のみが知りえた。

D類（77） 口径12cmとB類に含まれるかもしれないが、器高が6cmもあり、別系統のものと考えた。

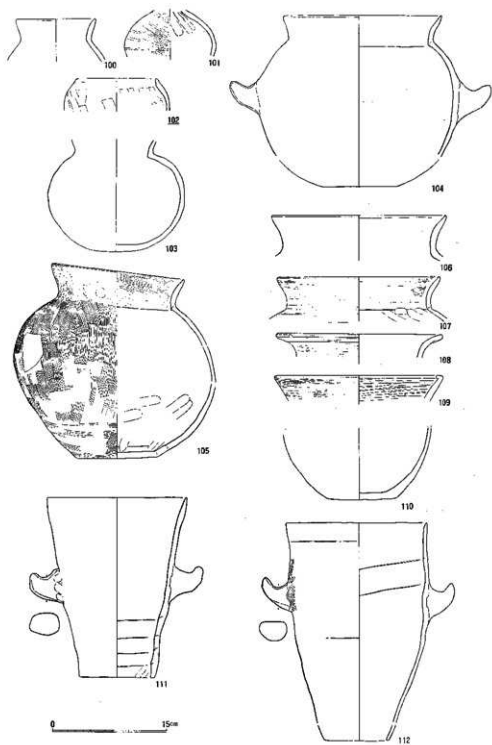
E類（81） 口径15.7cm、器高2.7cmの皿状を呈するもので、内面放射状暗文が施されて



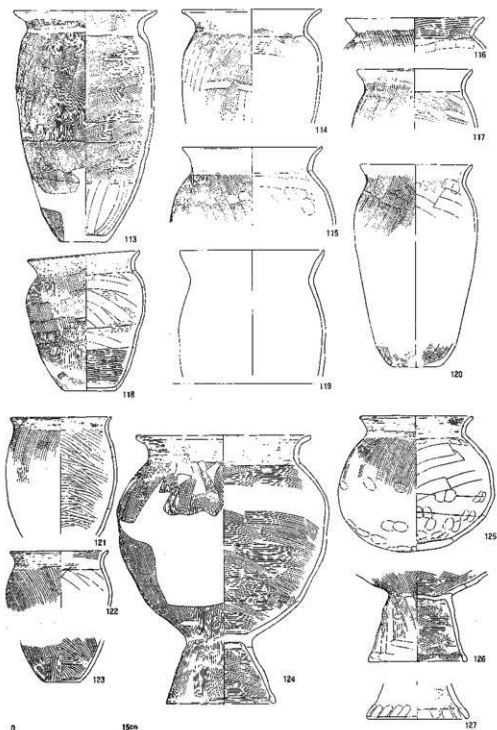
第20图 SD 5 出土文物实例图(4)



第21図 SD5 出土遺物実測図(5) (83SH5 カマド上攪乱)



第22図 SD5 山土遺物実測図(6)



第23图 SD 5 出土遺物実測図(7)

いる。胎土、色調とも一見してA～D類とは異なる。

F類(82) 口径8.7cm、器高9.5cmの大形品で、むしろ鉢に分類した方が良いかもしれない。

以上のように横做坏蓋の型式変化を考えるならばB2類→A2類の1系統しか知りえなかった。形態的には2類系の方がより忠実に横做していると考えられ、1類系より古い要素が感じられる。坏についてはC1類→B1類→A1類の1系統しか知りえなかった。形態的には内彎させる2類系の方がより古い要素と考えられる。坏Eについては搬入品と思われ、検討を要する。

高坏は坏部、脚部の形状から以下の通り分類した。

A類(85～87) 口径14～15cmのもので、脚部はゆるやかに開く。やや内彎した口縁と稜の作りの甘い84、85、87をA1類、稜の作りの甘い浅い坏部をもつ86をA2類とした。

B類(89、91) 稜を鋭く作り、やや外反気味の91をB1類、直線的に開く89をB2類とした。脚部はいずれもA類と類似する。

その他坏部では、口縁を直立させる81、83と同形態になる90などが知られる。99については最上段より出土しているため、あるいは混入とも考えられる。脚部はゆるやかに開くもの、水平に開くものなど色々であるが、99の薄手の赤彩された脚は胎土、色調とも一見して他の高坏とは異なり搬入品と思われ、坏E類とともに検討を要するであろう。高坏の型式変化は、B1類→A1類、B2類→A2類と考えたが、あるいは、A、B類ともまったく別系統の同時期のものの可能性もある。

101は卍形を呈する蓋、102は脚付壺の横做土師器と思われる。100は小型壺である。

蓋については型式差はなく、104の把手付の大形広口壺をA1類、把手のないものをA2類とした。108は折り返し口縁の壺、109は口唇を内側に折り返した蓋?の口縁と思われる。

甗は111の直線的に開いた胴で、把手はほぼ中央につけられたものをA1類とし、あまり開かず胴部に服らみをもたせ、把手を口縁近くにつけた112をA2類とした。型式的にはA2類の方が古い要素が感じられる。

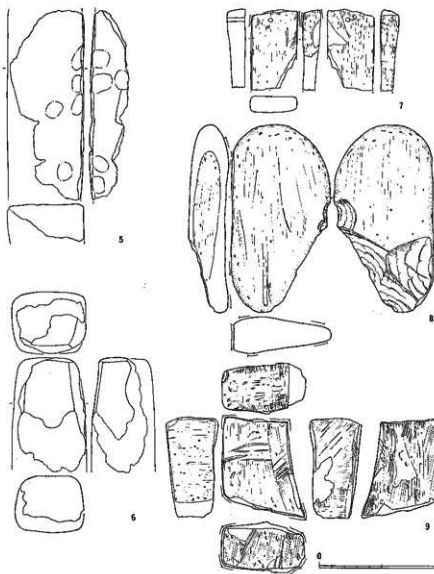
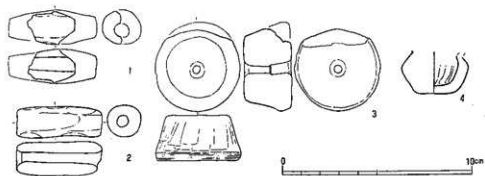
長胴甗については口縁部形態で以下のように分類したが、明確に時間差をもつものかどうか検討しきれなかった。

A類(113～116) 口縁が大きく外反したグループで、口唇部を水平に近く外反させる113、114をA1類、あまり外反させない115、118をA2類、くの字状に外反させる116をA3類とした。

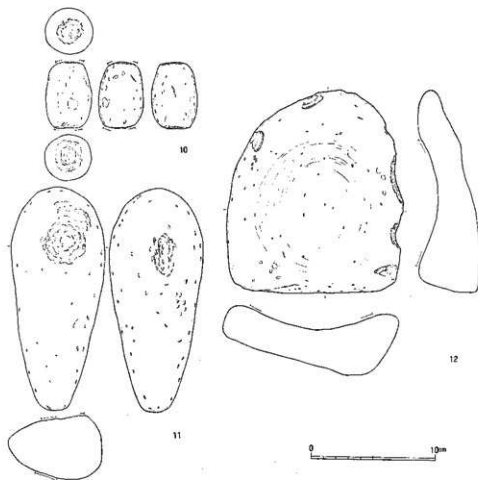
B類(117、119～122) 口縁がゆるやかに開くグループで、長く開き口唇をつまみ上げる117、119、120をB2類、短く開く121、122をB3類とした。

型的にはB2類→A2類の1系統のみ知りえたが、一番新出の要素であるA1類はA2類の中から生じてきたとも考えられ、A2類→A1類の型式変化を与えられるかもしれない。

台付甗は、肩のはらない胴部、口縁部は長胴甗A1類と類似する。国1バイパス4次調査のものより、肩のはらない点、口縁部の水平度がない点、脚が低く小さい点から古い要素をもつものと考えられる。(国1バイパス4次調査概報第6図17、18、第7図19を参照)



第24図 石製品・土製品実測図(1)(1SD4、2~4・9 Ic・IIa層、5SH4、6~8SD5)



第25図 石製品・土製品実測図(2)(10~12SD5)

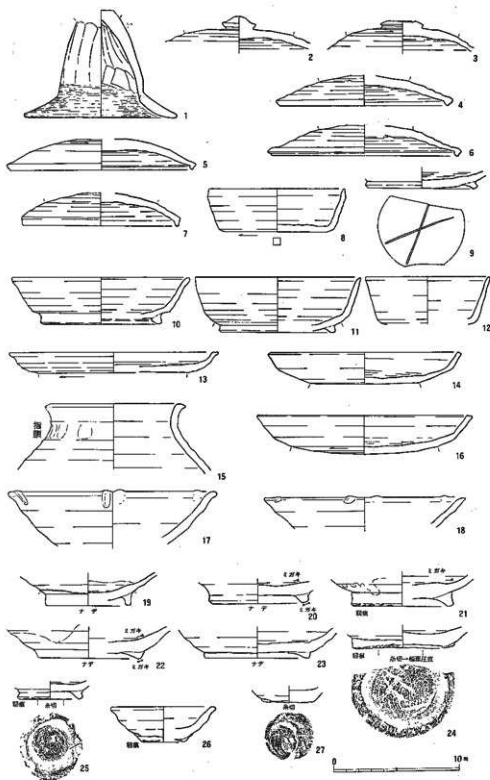
125は丸底の甕で、土師杯E類、高杯99などとともに西からの影響を考えたい。

以上土師器については各器種ごとの型式変化を見たが、須恵器との併行関係は、模倣坏蓋A類、坏A類が須恵器坏身A類段階（中村福年Ⅱ型式6段階）に該当する以外は、ほとんど須恵器坏身B・C類段階（中村福年Ⅱ型式4・5段階）に伴うものと考えている。

iii) 石製品・土製品（第24図・第25図）

1～2は直線的にのびた土樋で、1は平安時代のものである。3は径4.5cmの土製紡錘車、4は壺型の小形手握土器で、いずれも奈良時代の可能性がある。5は方柱状、6はやや丸味を帯びた方柱状の土製支脚で、いずれも古墳時代のものである。

砥石は有孔の手持砥石の7、自然礫を用いた中形の8、立方形を呈する9があり、石材質は7、9が凝灰岩、8が砂岩であることから9は仕上げ用、8は荒砥ぎ用と思われる。7、8が古墳時代、9が奈良時代の可能性がある。10の敲石は両面よく使いこまれており12の石皿とともに製粉具として使用されたものである。11はハンマーとして使用されたと思われる敲石である。10、12はSD5の上層、11はSD5の中層より出土し、いずれも古墳時代のものである。



第26図 古墳~中世包含層中出土遺物 (1SD5下砂礫層中2・4・9・14・17 2A区Ic~Ⅲa層上面、5・8・10・13・15~16 3AのⅢa層、19~27Ic~II層)

第3章 まとめにかえて

本調査地点は、発掘調査面積こそ少なかったものの、平安～中世の掘立柱建物2棟、溝3本、奈良時代では掘立柱建物1棟、溝1本、古墳時代の竪穴住居跡6軒、溝1本、遺物もポリコンテナー25箱分以上出土し、遺構、遺物とも豊富な内容を示し、改めて坂尻遺跡の重要性を再認識させられた調査となった。以下、本調査地点での各時代別集落景観の概略を述べて、まとめにかえたい。

平安時代(12C前半)は小規模な掘立柱建物のまわりに幅1mに満たない小規模な溝を一定の方向に配置し、排水用兼灌漑用としていた可能性がある。溝は直線的にのび、条里との関連が考えられる。また1C層中の遺物を見る限り、13世紀代に原野谷川水系の洪水があったらしいことが推定しえた。

奈良時代は、土間作りの掘立柱建物の付近に排水用の溝が配置されている。溝よりも東側ではⅢa層まで奈良時代の遺物が多く混り込むことから低湿地に近い状況だったかもしれない。時期的には包含層、遺構等の出土遺物は奈良の後半期のものが多い。第26図8の土器墨書は「宗」または「東」とも判読でき注目される。掘立柱建物は土間造りで国1バイパス地区で検出された総柱の倉庫群とは異なる。本調査地点より南へ100m程の県道調査区内より柱穴の掘方一辺1m以上もある大形の建物があり、それらの大形建物の北方周辺部に位置する小形の建物を中心とした官衙群の存在が推定され、さらに北方の国1バイパス地区で倉庫群が検出されたことは、佐野郡衙と推定される坂尻遺跡での官衙の配置を知る上で興味深いものがある。

古墳時代は竪穴住居跡6軒、溝1本の検出があり、その変遷は以下の通りである。



以上のような状況が見られ、古墳時代の集落移動の1つのパターンを知る上で、重要な事象を提示しえたと思われる。

最後になりましたが、現地調査の図面の作図では鈴木範子氏、押田原義執筆では高野由美子、森永明英の両氏には多大な協力を得ました。ここに記して感謝の意を表します。

参 考 文 献

- 山村・向坂・平野 1966 「出土須恵器の編年」『大沢・川尻古窯跡調査報告書』湖西町教育委員会
- 山村・平野 1962 「後期古墳の研究」『古代学研究』30 古代学研究会
- 川江秀孝 1979 「静岡県下の須恵器について」『静岡県考古学会シンポジウム2』静岡県考古学研究会
- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯跡群1』平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1978 『須恵器大成』角川書店
- 中村宏 1978 『陶邑Ⅱ』大阪文化財センター
- 中村宏 1980 『和泉陶邑古窯跡群の研究』柏書房
- 袋井市教育委員会他 1981 『一般国道袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書—坂尻遺跡第1次調査—』
- 袋井市教育委員会他 1982 『一般国道袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報—坂尻遺跡第2次調査—』
- 袋井市教育委員会他 1983 『一般国道袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報—坂尻遺跡第3次調査—』
- 袋井市教育委員会他 1984 『一般国道袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報—坂尻遺跡第4次調査—』
- 袋井市教育委員会他 1984 『坂尻遺跡—県道掛川袋井線道路改築工事に伴う発掘調査報告書—』
- 静岡県埋蔵文化財研究所1984 『原川遺跡昭和58年度発掘調査概報—一袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査—』
- 浜松市遺跡調査会 1984 『半田山古墳群A小支群・半田山Ⅲ遺跡』
- 浜松市教育委員会 1982 『向山遺跡・谷上古墳群発掘調査概報』
- 金谷町教育委員会 1983 『駿河山2号墳発掘調査概報』
- 菊川町教育委員会 1983 『大岡ヶ谷・篠ヶ谷・西宮浦—静岡県菊川流域の横穴墓群調査報告—』
- 静岡県教育委員会 1983 『遠江の横穴群（静岡県内横穴群分布調査報告書Ⅰ）』
- 奈良国立文化財研究所1977 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』

坂 尻 遺 跡

—昭和59年度緊急発掘調査概報—

1985年3月20日

発行 静岡県袋井市教育委員会

〒437 袋井市国本3070—1

印刷 株式会社 開 明 堂

〒430 浜松市中沢町1—1

図版 1

(A) 調査地点遠景
(北より)



(B) 中世～奈良時代
調査区全景
(東より)



(C) 奈良～古墳時代
調査区全景
(東より)





(A) SH 5
全景(北より)



(B) SH 1
カマド(西より)



(C) SB 1
全景(北より)

図版 3

(A) 古墳時代
調査区全景
(東より)

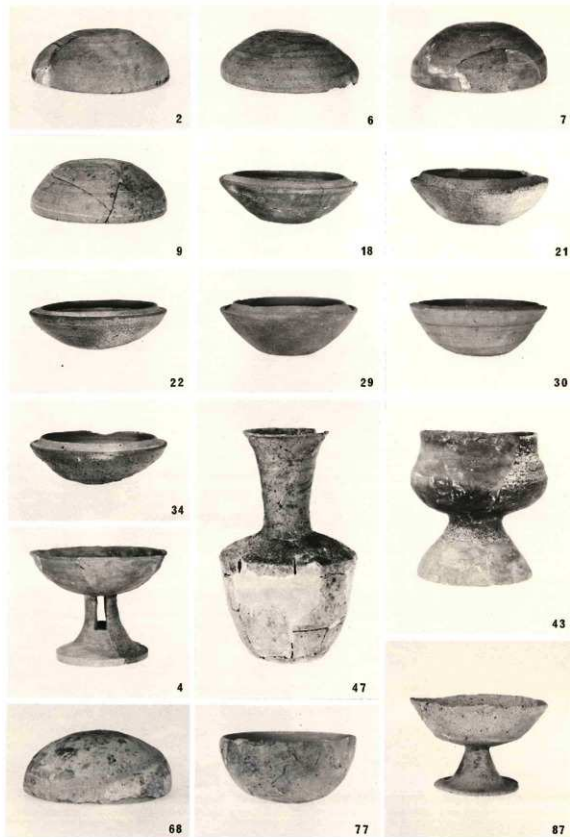


(B) SD 5
遺物出土状況
(南より)



(C) SD 5
遺物出土状況
(部分)





S D 5 出土土器 (No.は挿図No.)



102



117



111



104



113



114



112



118



125



121



SD4-3